

20世紀資本主義 の歴史

I 出現

藤瀬浩司 *Hiroshi Fujise* 【著】

名古屋大学出版会

20世紀資本主義 の歴史

I 出現

藤瀬浩司 *Hiroshi Fujise* [著]

常州大学图书馆
藏书章

《著者略歴》

ふじせ ひろし
藤瀬 浩司

1933 年 広島市に生まれる

1961 年 東京大学大学院社会科学研究所博士課程単位取得退学
名古屋大学経済学部教授、愛知淑徳大学現代社会学部教授などを経て

現 在 名古屋大学名誉教授、経済学博士

著 書 『近代ドイツ農業の形成』（御茶の水書房、1967 年）

『資本主義世界の成立』（ミネルヴァ書房、1980 年）

『国際金本位制と中央銀行政策』（共編著、名古屋大学出版会、1987 年）

『世界大不況と国際連盟』（編著、名古屋大学出版会、1994 年）

『欧米経済史』（放送大学教育振興会、1999 年、改訂新版 2004 年）ほか

20 世紀資本主義の歴史 I

2012 年 9 月 10 日 初版第 1 刷発行

定価はカバーに
表示しています

著 者 藤 瀬 浩 司

発行者 石 井 三 記

発行所 一般財団法人 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1 名古屋大学構内
電話 (052)781-5027/FAX(052)781-0697

© Hiroshi FUJISE

Printed in Japan

印刷・製本 備太洋社

ISBN978-4-8158-0704-7

乱丁・落丁はお取替えいたします。

㊞ 〈日本複製権センター委託出版物〉

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、必ず事前に日本複製権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

二〇世紀資本主義の歴史Ⅰ——目

次

序 章	二〇世紀資本主義の歴史をどのように理解するか	1
-----	------------------------	---

第I部 二〇世紀資本主義の出現

第1章	二〇世紀資本主義のブレイクスルー	9
-----	------------------	---

第2章	大型企業体の生成	19
-----	----------	----

一	成立の条件	20
---	-------	----

二	技術と企業組織	26
---	---------	----

三	企業と経済社会(1) — 労働編成と管理組織	36
---	------------------------	----

四	企業と経済社会(2) — 市場行動と金融システム	45
---	--------------------------	----

第3章	階級社会の解体と国家の社会的機能	51
-----	------------------	----

一	一九世紀階級社会の解体	51
---	-------------	----

二	社会改革と二〇世紀の構想	56
---	--------------	----

三	社会改革の開始 — 福祉国家への道	64
---	-------------------	----

第4章 二〇世紀世界システムの胎動……………79

- 一 中心の機能分化 80
- 二 周辺工業化の進展 97
- 三 一次産品輸出地域の形成 110

第5章 多角的決済の世界システムと国際金本位制……………123

- 一 二〇世紀初頭における多角的決済の世界システム 123
- 二 国際金本位制の歴史的性格 136
- 三 帝国主義時代と国際秩序の転換 149

おわりに……………163

付	表
注	卷末 41
索	卷末 13
引	卷末 1

序章 二〇世紀資本主義の歴史をどのように理解するか

二一世紀初めの我々は、経済、社会、政治、そして世界の大きな転換点に立っている。転換の過程は摩擦や抗争、経済的危機や政治的危機を伴いながら少しずつ前進している。それは古いタイプの資本主義が新しいタイプのそれに転換する過程と捉えることができる。本書は、いま解体しつつある資本主義のタイプ、二〇世紀資本主義がどのように生まれ、構築され、成熟した姿を示し、最後に終焉の過程に行き着いたかを見さだめることを目的としている。その中で、二〇世紀資本主義のもっている基本的な性質、また固有の限界を明らかにできればと思う。

二〇世紀資本主義という場合、固有の技術体系を前提に、様々な、広い意味での社会的諸要素を統合した資本主義の一つのシステムを考えている。同じようにして、一九世紀資本主義、あるいはいま生成しつつある二一世紀資本主義というシステムを考えることができる。⁽²⁾ こうした資本主義システムは単に経済関係によつて動かされているとはいえない。確かに経済関係は強力であるが、この社会システム全体を支配しているとか、あるいは経済諸関係からの演繹によつて社会システム全体を説明できるとは思えない。むしろ資本主義という社会システムは、政治と経済という相互に独立した二つの側面をもつ構成体といえよう。また社

会・文化などの政治や経済の基盤も、その地域や国家における資本主義に固有の性質を与えているだろう。

資本主義の構造を捉える場合、この書物では三つの要因に視点を据えたい。一つは企業組織である。企業は資本主義の成長の動力であるから、分析の基本的な視点となる。企業はどのような経営をもち、これらの企業が競争や結合などによってどのような関係を形作っているのか。企業経営はどのような労働組織・雇用関係をもち、また生産と流通の関係、さらにはどのような金融システムを構築しているのか。それぞれの時代の企業組織は、技術体系や制度との関連の中で育成され、時代に固有の形態を生み出している。一九世紀に資本主義は、イギリス綿工業に典型をもつ「自由競争的産業組織」を生み出した。それは、マンチェスターに集中した中小工場群の高度に発達した分業を基礎に、専門的な商業資本の強力な媒介によって組織されていた。一方で二〇世紀の中心的な企業組織は大型企業体 large-scale corporation である。チャンドラー (Alfred D. Chandler Jr.) をはじめとする経営史研究は大型企業体の構造や性質を明らかにしてきた。⁽³⁾ それは大規模資本投資によって大量生産・大量流通を実現し、多様な事業単位を階層的経営組織によって管理運営する。この企業組織こそ二〇世紀の経済成長の原動力であり、同時に二〇世紀資本主義の基本的特徴の一つである。

第二の要因は国民国家である。国民国家は資本主義の政治システムであり、社会を編成し、社会経済秩序を設定している。国民的経済制度や経済政策もまた同様である。社会的諸利害、経済的諸利害は直接の政治過程を通じて編成され、統合されるが、この過程は通常一定の方法（指導理念など）や体制（君主制、議會制など）に従っている。国民国家にとっては、経済的合理性を追求することと、社会的均衡を図り社会的安定を導くことは、いずれも基本的課題であり、両者の間に常に緊張と対立があった。これまで資本主義の経済発展は、その段階や局面に応じて、社会経済秩序を革新してきた。秩序の革新は、新しい制度・政策の設定

であると同時に、古いものの破壊や再編という「創造的破壊」の過程であったが、それは社会的意思決定をめぐる政治闘争を生み出した。こうした政治過程の帰結として、国ごとに固有の社会経済秩序が形成されるが、そこには国際的に見て同時代的な共通性も刻み込まれている。

二〇世紀国家は、いうまでもなく、一九世紀の国家タイプとは大きく異なっている。一九世紀国家は、成熟期のイギリスに見るように、すぐれて階級国家であった。地主と新興のブルジョワからなる少数の有産階級が支配階級であり、人口の大多数を占める労働者あるいは無産階級は一部を除いて政治的権利を認められていなかった。政治指導者は貴族で地方名望家の地主からなり、政治を動かす理念は個人主義と自由主義に基づいていた。一方で二〇世紀国家は福祉国家と表現されることが多い。「福祉」は国家目的を表すものであるが、二〇世紀国家は大胆な所得再分配を伴う社会保障だけでなく、これと連携して雇用の確保（不況克服）、経済成長を目的として設定した。こうした目的を実現するため、国家は直接的に社会的機能と経済的機能を取り込み、政治的・経済的に強大な権力を集中した。国民的共同体としての国家、その組織性・計画性が統合のイデオロギーとなり、コーポラティズムと政治的民主主義が権力集中を支えた。

視点を据える第三の要因は、世界システムである。世界システムは国際政治と世界経済の両面をもつが、いったん成立すると、他の要因を規制する独立の要因となる。資本主義世界システムは世界経済を基盤として発展した。世界経済は、国家・民族・文化を越えた、世界的な分業体系を表している。地理上の「発見」のあと、ヨーロッパを中心とした世界経済が成長し、イギリス産業革命と一九世紀の資本主義発展は、独立あるいは孤立していた地域を次々と統合していき、二〇世紀初めには地球を包括する世界経済、グローバル経済が成立した。世界システムはある時代に固有の構造をもっている。構造把握のためには、中心（中核）

と周辺、あるいは中心・半周辺・周辺というウォラーステイン (Immanuel Wallerstein) の視点が大切である。⁴⁾ 注意すべきは、経済的機能の分化に対応して、国際政治における国民国家の位置、序列も決まってくることである。各国民国家はこのような国際的地位と対応して、独自の政治的・経済的な体制と行動をとる。まず中心諸国には、先端的・高付加価値の工業生産および貿易と国際金融の中心機能が集中し、これに付帯して情報、科学技術の中心的機能、さらには強力な政治的・軍事的能力が形成される。これに対して周辺地域では原料・食料や低位工業製品の、中心への供給が支配的であり、低所得水準と国家の低い社会的統合能力、政治的・軍事的能力が特徴的である。こうした状況の下で、周辺地域から「工業化」などの手段によって中心への運動、求心運動が起こり、半周辺諸国が形成されるが、その反面、中心諸国からは経済的・政治的圧力、遠心作用も加わる。また中心諸国の中には世界システム全体の調整・制御を担う基軸国が登場する。それは通常、国際政治体制における覇権を同時に把握している。一九世紀の基軸国はイギリスであった。周知のように、イギリスは産業革命とヨーロッパ戦争の勝利、さらには一九世紀第三四半期に自由貿易体制によって、基軸国の地位とイギリスの平和 Pax Britannica を確立した。しかし一九世紀末から、世界システムの転換が始まる。そして二つの世界戦争を通じて、アメリカ合衆国が世界経済の基軸と同時に国際政治体制における覇権を確立するのである。こうした転換は同時に、国際秩序のあり方に大きな変化をもたらした。国民国家が唯一の権利主体である状況は、国際関係だけでなく、国内問題にまで、国際的な制約・調整・介入を許容する方向へ修正され、国際連盟や国際連合をはじめとする、一連の国際機関が設立された。

以上三つの要因は、世界経済の成長と稠密化、グローバル経済の進展を底流としながら、それぞれが独立の要因として歴史過程を形作っていく。これらの要因は相互に強く関係し合い、ある時には対立し混乱を引

き起こす。しかし数多くの制度や政策の設定によって、やがてこれらの要因は相互に接合され、一つのシステムを形成していく。一九世紀資本主義についても、また二〇世紀資本主義についても、システムとしての資本主義はこのようにして成立したと考えられる。一九世紀資本主義、同様にまた二〇世紀資本主義はいずれも一挙に成立したのではない。それぞれが生成し、成熟し、そして消滅する発展の歴史をもっている。

しかも興味深いことに、両者は共通する発展の軌跡をもっている。いずれの場合にも、対応する四つの時期局面に区分できる。最初の二つの局面は、新しい資本主義の核や成長パターンが登場、あるいは出現する局面、phase of emergence と、こうした新しい要因が経済と政治を全体的に組み替える、あるいは構築する第二の局面、phase of conversion or construction である。第三局面は、一つの資本主義システムが成立し、技術的に制度的に、また国際的により完成された基盤の上に、世界的規模で経済的成長が達成される、資本主義の成熟の局面、phase of maturity である。そして最後の局面は、古い資本主義システムが様々な面で限界を露呈し、新しい資本主義の模索と再編成が試みられる局面、phase of reorganization である。

一九世紀資本主義について、時期的に見ると、一七八〇年頃から一八一五年、一八一五年から一八五〇年、一八五〇年から一八七三年、および一八七三年から一八九五・九六年に区分できる。第一局面はイギリス産業革命の進展、第二局面はナポレオン戦争後の国内政策・対外政策をめぐる抗争を特徴としており、第三局面は自由貿易体制と運輸革命による世界経済の拡張の時代であり、最後の局面は一九世紀末の大不況期である。こうした局面交替は、コンドラティエフ (Nikolai D. Kondratiev) やシュンペーター (Joseph Alois Schumpeter) が提起した長期波動 long waves を想起させる。⁽⁶⁾ 長期波動の二つの組み合わせが、上記の四つの局面交替と重なるのである。一つの長期波動は二つの局面に分かれるが、各波動の最初の局面はそれに続く局面に対

して、経済成長率が相対的に高い傾向にある（より短期的な変動（キチン循環やジグラー循環）はこうした波動の構成要素であるが、ここでは考慮の外に置いている）。同様のことが二〇世紀資本主義についてもいえる。一八九五・九六年から一九一四年、一九一四年から一九五〇年、一九五〇年から一九七三年、および一九七三年から一九九五年ごろという四つの局面である。この区分は、始点と終点を新たに設定した他は、OEC Dの統計研究者マディソン（Angus Maddison）の時期区分と一致している^{2）}。第一局面は大型企業体が登場し、米独に工業的中心が形成される局面であり、第二局面は戦間期の新秩序形成をめぐる抗争の時代である。そして第三局面は二〇世紀資本主義システムが成立し、高成長期、「資本主義の黄金時代」が実現する時代であるのに対して、第四局面はインフレーションとブレトンウッズ体制の崩壊に始まり、各国の改革と世界経済の構造転換が進む時期となった。

本書、『二〇世紀資本主義の歴史』では、多様な選択の中で、国ごとに異なった形態をとりながら、二〇世紀資本主義というシステムがたどった、一世紀にわたる歴史過程を概括してみたい。本書は試論的なものであり、方法的に、また事実認識において、まだ多くの問題を残している。読者の多面的な批判を期待している。本書の全体構成は、先に述べた局面交替に沿って、第一部「二〇世紀資本主義の出現」、第二部「二〇世紀資本主義の構築」、第三部「二〇世紀資本主義の成熟」、および第四部「二〇世紀資本主義の再編」を計画している。ここに刊行する書物は、その序章と第一部である。ここでは、二〇世紀資本主義を構成する新しい要因がどのように企業組織、国家機能、および世界システムに展開されたかを問題にする。

第I部 二〇世紀資本主義の出現

第1章 二〇世紀資本主義のブレイクスルー

一八九五年ないしは一八九六年は経済史的に見て大きな転換点である。それは決して特定の政治的な事件に結びついてはいないが、これ以後一九一四年の第一次世界大戦の勃発までの時期は、新しいタイプの資本主義、我々がいうところの二〇世紀資本主義の出現期であり、その第一局面である。この局面では、世界経済は多くの摩擦を伴いながらも拡張し、各国は全体的に高い成長を享受した。そして二〇世紀資本主義を構成する、経済的、政治的核が登場し、大きな影響力を発揮し始める。この章の目的は、問題の局面の成長と循環を概観することであるが、その前に、問題の局面に先立つ一九世紀末大不況について簡単に触れておく。

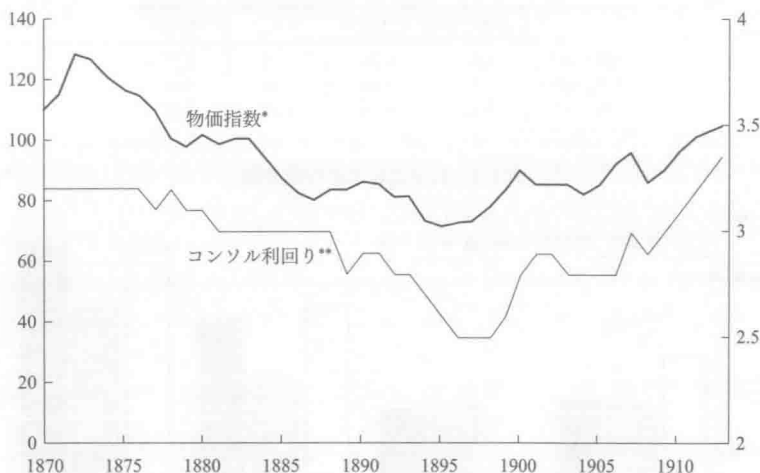
(1) 一九世紀末大不況

一八七三年にオーストリア・ドイツとアメリカ合衆国を起点とする世界恐慌が起こった。一九世紀においては、中期的景気循環、あるいはジュグラー循環は、ほぼ七～一〇年の周期で好況、不況を繰り返し、好況から不況への転換点では恐慌を伴うのが常であった。ただ一八七三年恐慌は、それまでの恐慌がイギリスを

起点としたのに対して、オーストリア・ドイツおよび合衆国という新興国が起点であり、加えて一八九四・九五年まで続く一九世紀末大不況の起点となった。研究史において「一九世紀末大不況」という表現と時代設定には議論がある。いまではより広く国際的現象として使われることがあるが、「大不況」the Great Depression という表現は、もともとイギリスで同時代の人々が用いていたものであった。同時代の人々は、かなり広く不況感をもっていたと思われ、「大不況」という言葉は定着していた。そして議会では一八八五年の「貿易および産業の不況に関する王立委員会」など、いくつかの調査委員会が設立されている。しかし不況の事実、多数意見に従えば肯定されなかった。おそらく「不況」という言葉は、景気循環における恐慌後の、金融的緊迫、倒産、売上の減少などという状況を想起させたからであろう。またこの時期に関する古典的研究を発表したビールズ(H. J. Beales)も、大不況というのは一つの神話に過ぎないとし、この言葉を否定している⁽¹⁾。

ただビールズは「大きな困難の環境における進歩の一時期⁽²⁾」として、大不況期をある特徴をもつ、まとまった時期と考えている。彼は、以前の繁栄期に比較して、この時期に企業利潤の低下があったとしている。実際に、この時期が経済発展の一つのまとまった局面であり、一九世紀第三四半期の繁栄の局面から転換があったことは、様々な点から明瞭である。この時期を通じての物価と利子率の低下はこのことを示している。イギリスの物価指数とコンソル公債(元金償還義務のないイギリス政府長期公債)の利回りの変動を見ると、一八七〇年代初めから九〇年代半ばまで一貫して低下傾向を示している(図一参照)。物価は一八七三年恐慌以降、いくつかの小さな波を描きながら低下傾向を続け、一八八〇年代半ば、あるいは九〇年代半ばに深い谷間に低落している。利子率もまた全体として低下傾向にあるが、低下は八〇年代後半から九〇年代末

図 1-1 物価指数と利子率



* 左目盛：1865-1885 年の平均 = 100。The Rousseaux Price Indices, B. R. Mitchell, *Abstract of British Historical Statistics*, Cambridge, 1962, pp. 472-473.

** 右目盛：パーセント。Yield of Consols, *ibid.*, p. 455.

まで著しい。問題の時期は工業の不況に始まり、八〇年代に農業部門の不況へとつながっていったが、物価の下落や長期利子率の低迷から、時期を通じて収益見通しや投資機会が浮揚的でなく、不況感の原因となったことがうかがえる。

この大不況期に中期的な景気循環は二・五回あった。一八七三年恐慌の後、一八七九年まで不況が続き、ようやく一八八〇年から一八八二年に二年余りの好況があったが、それは一八八三年恐慌から一八八七年までの不況に反転する。一八八八年から一八九〇年に好況が出現したが、いわゆる「ベアリング恐慌」により一八九一年から一八九四年の間は不況が続いた。それぞれの循環を見ると、問題の時期は長く深い不況と短く浅い好況という特徴をもっている。シュピートホフ (Arthur Spiethoff) はドイツの状況を念頭において一八七四年から一八九四年までの二一年間のうち、六好況年に対して実に一五不況年の存在を確認した。^①